母は不審の頸を捻りながら、目を閉ぢて八年前の記憶を手繰ると言ふ風であつた。

『そうだ、名前では御わかりになりますまい、僕はあなた方が車坂に入らしつた時分、隣りの馬五郎と言ふ悪漢の爲めに苦しめられて居りました時、いろ〳〵御親切に預りました道之助です、』

『エッ、あなた様があの時の兄さんで……まア……、』

母は思わず乗り出して、凝と道之助の顏を注視めた。

『まア御立派におなりなされましたなア、私も實は上野で御別れ申しましてから、什麽なされた事かと思ひまして、什麽かして御目にかゝり度と始終思つては居りましたが、其内に私も不幸に不幸が重りまして、此那境遇に落ちぶれて仕舞ひまして、遂御尋ねして見る事も出來ず、まア御立派におなりなされましたなア、實は今が今までも、此子供には始終、あなた様の事は御噂さして聞かして居りました様な譯で御座います、夫れにしてもまア御立派におなりなされましたなア、』

『イヤ實に不思議ですなア、僕も春日町で御子さんの話を聞いて妙に御宅に上つて見たくなりましてね、ハアそうすると此の姉さんは……およし……よしさんでしたね、』

『左様で御座ひます、』

『成程解らん筈です、あの時僕は十三でしたから、よしさんが慥か弟と同年の様でしたから、そうするとあの頃八ッでしたな、』

『ハイ左様で御座いました、實は私も先刻から什麽やら……御見受けした事がある様に思われましたが……、』

『およしはうつ向ひた儘言つた。

『イヤ僕も先刻田町で御目にかゝつた時から、見た事がある様な氣がして居つたのですが……然し奇遇ですな、』

恁ふ言つて道之助は、尙ほ彼れから一度車坂に尋ねた事や、行先不明なので遂其

儘になつて居た事を語つた。

『それはそふとあれから弟さんに……、』

母は問ふた、道之助は言へ遲れたと言ふ風で、上野で別れてから品川に弟を探した事からまだに行衛不明な事、自分は住吉家に救われて今は大學に通つて居る事かへ摘んで話した。

恁ふした奇しき邂逅に話の盡きる隙もなかつた、道之助は思ひ出した樣に時計を出して見て、

『ヲ、もふ三時です、いくらか御疲れでせう、飛んだ御邪魔を致しました、もふ此れからは切めては萬分一の御報恩をする積りですから、學校の歸りにでもちよい〳〵御訪ね致します、』

道之助は弟を顧みて、

『君も大に孝行し給へ、君の名は……幸一君だね、』

言ひながら道之助は懷から五圓紙幣を出しておよしの前に置いた。

『持ち合せがありませんので、あまり心ばかりですがまた其内に何とか……何卒とつて置いて下さい、此れからは……、』

恁ふ言つて道之助は、辭退の言葉を後に急いで出た。

『三十二』

親切な小母さん、有難い小母さんとして、今日が日までも思ひ出さない日もなかつた、一目逢つて見度い、逢つて見て先きが苦勞をして居たら、出來る限り努めてやりたい、若し善かつたら共に自分の今の安樂も嬉んで貰はふと、明暮思つてゐた人に逢つて見れば彼仕末。

それからは、道之助は學校の歸りには、どんな日でも必ず入口から頸だけ入れて覗ひて歸るとも、屹度一日に一度は見舞ふのであつた、そして折々には幾干かづゝ

の金を持つて來ては、およしに渡して歸るのであつた。けれども元より道之助は、兎に角奇遇の身であつた謙太郎に、事情を語れば、せめて母の病氣の治る內、親子を救ふ位の事は屹度して呉れるのは知つて居る、且つ謙太郎でなくとも、富美子に話せば嬉んで一緒になつて、同情して呉れるのも知つて居る、けれども道之助の立場として、如何しても言ふ事は出來なかつた。で少しづゝでも金を貢ぐと言ふ事は今の道之助としては中々辛い仕事であつた。勢ひそれの爲めには、當然必要な本も圖書館の借り本で間に合せねばならなかつた、偶には友人との交際で、一緒に肉をつゝく事も出來得る限り避けねばならなかつた。

恁うした中にも、既ふ一月の日は經てしまつた、道之助は急に調べる物があつて三日程菊坂へ行かなかつた、が氣になつてならないので、遂に其日の夕方、夕餉を濟すと一寸學校までと言つて置いて家を出た。

根津神社の前を上つて、一高の柵に沿ふて暗い通りを、菊坂の家の事など考へながら歩行て居ると、向から早や足に來かゝる女があつた、見ると其れがおよしであつた、道之助は不審に思ひながら立つて待つて居ると、およしは其れとも氣付かずに行過ぎ樣とした。

「よしさんぢやないか、」

道之助は聲をかけた、およしは少なからず周章いた風であつた。

「何處へ行くの、」

およしは極り惡るさふに、

「あの……いつも毎日入らして下さるんですのに……此のきり御見えにならないし……もし御病氣ででも入らつしやるんぢやないかと思ひまして……一寸出た序で御座いましたから、母も心配して居りますし……御近處へでも行つて伺つて見やうと思ひまして……」

およしは途切れ〳〵に、うつむいた儘言つた。

『そふか、イヤ別に病氣でもなんでもなかつたんだがね、急に調べるものが有つたので、學校へも行かずに居たもんだからね、實は今行かうと思つて出て來たんだ、お母さんは什麼したかね、』

およしは如何にも心配そふに、

『どうしたんですか、今日は朝から眠つてばかり居るんですけれど……お醫者さんの話では、あんまり好くもないのかと思つて居るんですけれど……でも夕方から大分元氣も附いて來た樣ですから……、』

『そふ、ぢや早く行つて見やう、』

恁ふ言つて道之助は歩み出した、およしは極惡るそふに後から次で歩いた、大學前へ出ると今夜はとりわけ寒さが強いので、割に人の通りも少なかつた、二人は大學の塀に沿ふて歩いた。

『よしさん寒いだらう、』

道之助は後から歩いて來るおよしをいたはつた。

『イエ、』

およしはうつむいて恁う言つた。

『そんなに後から來んでも好いよ、ちつと並んで見給へ、』

『……』

およしは無言のまゝ、道之助の影にかくれる樣にして顏をそらした。

『ハッ〳〵〳〵隱れんでも好いよ、ハッ〳〵〳〵、それはそふとよしさん、何か買つて來給へ、幸ちやんのお土產を、何かよからふな、そふだ彼の家の粟飴がよからふ、』

道之助は、向側の黑い暖廉の下つた家を指しながら、幾千かの金を手の掌に乘せて、およしの前に出した。

『イーエよろしふ御座います、始終頂いて居るんですから……、』

『マア買つて來給へ、よしさんが欲しくなければ幸ちやんと僕で食ふから好いよ、買つて來て呉れ給へ』

およしは微笑ながら道之助から金を受取つて、

『ぢア栗飴にしませうか、』

『さア何でも君の好きなのを……とそふぢやなかつた、よしさんにやるんぢやなかつたつけ、幸ちやんと僕が食ふんだからと、矢張栗餅がよからふ。』

およしは小走りに電車道を横切つて向側に行つた、道之助は店先に立つて居る、およしの後姿を眺めながら歩み出した、丁度大學の正門の側迄行くと、後からおよしが走つて來た。

『栗餅が有つたかね、』

『ハイ御座いました』

『よしさん、何卒下さいましつて言つたつてやらないよ、ハッ〳〵〳〵、』

およしは片袖に頬をうづめて笑つた。

『幸ちやんが待つて居るだらう、君が僕の所へ行くつて言つて來たの、』

『イーエ……三丁目までつて言つて……、』

『そふか、ぢや待つて居るよ、早く行こふ、』

二人は急に足を早めて歩み出した、

『三十三』

戸を明けると出合ひかしらに幸一が頸を出した、

『アラ原さんが來た、』

幸一は如何にも嬉しさうに、ポクリと頸を垂れた。そして其のまゝ母の枕元に驅けて行つて、道之助の來た事を知らせた、母は微かに頸を廻して入口の方を見た、其のうちにおよしは上つて行つて、途中で道之助に逢つた事を話した、道之助も次

で上つた、母は道之助の顏を見ると、如何にも嬉しさうな色が、おち凹んだ窩眼の底に窺れた、そして幽に笑を泛べた、

道之助は枕元に座つて、此の二三日來られなかつた理由を語つた、母は痩せ細つた手を伸して、頸のあたりにまつはつて居る寢卷の襟を引きよせながら、

『お忙しい處を御出下さいまして……御忙しく入らつしやる事は知つて居りましても、もし御病氣でゝも入らつしやるのぢやないかと思ひまして……よしが昨日から心配して……お端書でも上げて見やうかなんて申して居りましたが……、』

『イヤ大丈夫です、どうかして一寸でも來て見やうと思つても、遂忙しいので……』

『左樣で御座いますとも、それに私もお蔭樣で大分よろしいので御座いますから』

『そふですつてね、イヤ見た處でも大分顏色が好い樣ですよ、』

其實道之助は、今夜來て見て僅かに三日の間に變つた相貌に少なからず心を痛めて居るのであつた。

『もふ此の寒中さへ通せば、もふだん〳〵暖かくなるばかしだからね、今の內だけの辛棒ですよ、』

道之助は恁う言つて力を附けた、母は嬉しさうに、

『此れと申しますのも、皆貴郎樣のお蔭で御座います』

恁ふは言つても、母はもふ既に自分の命數の盡きる時が、迫つて居る事は知つて居る、

其內におよしは茶を汲んで道之助の前に出した、道之助は茶椀を取り上げながら、菓子の事を思ひ出しておよしを顧みた、

『よしさん、彼れを出して下さい忘れて居た、』

およしは笑ひながら、新聞に包んだ粟餅を持つて來た、道之助の前に出した、道之助は新聞を披げながら、

『よしさん、』

「ハイ、」

「いくら頼んでも駄目だよ、ハッ〳〵、」

およしは唯笑つて居る、其内に道之助は包みを廣げて、

「幸一君食べないか、小母さん如何です、上げませうか、」

道之助は恁ふ言つて、軟かそふなのを一ッ摘んで出した、母は淋びしい頬に淋びしい微笑を浮べながら、細つた手を出して道之助の手から菓子を貰つた。

「ヲイ幸一君やらんか、姉さんはね、決して食べないんだつて、」

言ひながら道之助は一つ摘まんだ、幸一も姉の顔を見ながら摘んだ、およしは袖で顔を隠して笑つて居る、

「家に歸つてね、何卒呉れて下さいつて手を突て頼んだつて上げない約束で買つて來たんだから……僕と幸一君と二人で食ふのだから、澤山食べ給へ、

幸一は幽かな笑みを泛べて、氣の毒そふに姉の顔を眺めた、

「よしさん、」

「ハイ、」

「好い加減に强情を止して、御願ひしたら什麼だ、」

「アラ、私强情は……、」

「張らんと言ふんだね、ぢや矢張り頂戴したいと言ふんだね、」

およしも母も微な聲を上げて笑つた、

「ぢや上げ樣、さア御上り下さい、」

道之助は新聞共およしの前に押しやつた、入らつしやる度に恁ふして頂いて……」

「そらまた始めたぞ、マア好いから一つ御摘みなさい、」

道之助は一つ摘まんでおよしの前に出した、およしは極り惡るそふな手を出して受け取つた。

恁よした心おきない團欒の内に、心おきない道之助や姉弟の笑聲を聞いて、母も

また心よい笑ひを洩した、

道之助は時計を出して見て、

「ヲ、最早九時か、」

「もふ御歸りで……、」

母は道之助の顏を眺めて言つた、

『今晩少し用事がありますから、また明日來ますよ、』

「左樣で御座いますか……、」

母は何か用がありそふなので、道之助は母の顏を見ながら、

『何か御用が有りますか、』

「あの誠に恐れ入りますが、一言御願ひして置き度事が御座いまして……、」

『そふ、何ね僕の用は急と言つても其那に急くのでもないのだから、』

道之助は恁ふ言つて、再び跪座いて見せた、

『左樣で御座いませうか、誠に恐れ入りますが……、』

母は恁ふ言ひながら、およしを省て呼んだ、

『何か御用、』

およしは恁ふ言つて、母の枕元に寄つた、

『お前、氣の毒だがね、私の體を少し起して見てお呉れ、』

『什麼したの、お母さん、』

『イヤ寢て居て失禮だから、』

道之助は慌てゝ、

『おばさん何を言つてるんだ、何も起きなくつたつて……、』

恁ふ言つて道之助は、母が起き樣とするのを制した、

『でも失禮で御座ひますから、およしお前私を抱く樣にして居てお呉れ、』

物堅い母は、自から細い手を突張つて起き樣とした、およしは止むなくそつと母

の體を支へる樣にして起した、道之助は如何にも困つたらしく、

『小母さん困るよ、』

「イーエ、それ處ぢや御座いません、入らして下さいました時丈は起きて見たひと思ひましても……遂衰つて居りますので、」

母は一頻り力のない咳嗽を續けた。

『失禮で御座いますが、此れで御免下さいまし、』

母は寢卷の襟を掻き合せながら、

『實は此間中から、御願ひ申上げたいと思つては居りましたが、恁ふして厚い御情に預つて居ります上に、此上御願ひ申すなんてあまりに失禮だと思ひまして、今迄御願ひ出來ずに居りましたが御寛の通り私ももふ……、』

母は寢卷の袖で涙を拭つて、

『近い事と思われますが……そふなりますと元より此れと言ふ親族とても御座いま

せず、此の二人が誠に困るので御座いますが……何卒御助け下さいます樣……御願致したふ御座います、』

母は途切れ〳〵に恁ふ言つて、細い手を合せた、道之助は慌てゝ其手を分けて、

『小母さん其事なら、決して御心配には及びません、此の道之助が一心にかけて御世話します、實は私からお願ひしてましさんと幸一君に、兄弟になつて貰ひたいと思つて居つたのです、僕もね、其内に學校を出て仕舞へば、今よりはまた何とか出來ますからね、』

道之助は母の手を握つて、沁りした調子で言葉少なに言つた、

『もゝ勿體なふ御座ひます、』

恁ふ言つて母は唯泣くばかりであつた、話は暫く途絶えた、夜は何時の間にか更けて、四邊は寂となつた、幸一もまた晝の勞れにか火鉢の傍に圓くなつて、寢て仕舞つた、而して寢息の音幽かに聞えた、母は幸一の寢顏を延び上る樣にして眺めて

また一頻り泣くのであつた。

『三十四』

道之助は何となく夜前から菊坂の家の事が氣にかゝつてならなかつたので、常よりは早く家を出た、而して學校へ行く前にと思つて、菊坂への下り口まで行くと、下の方から小走りに上つて來る幸一に逢つた、

『お母さん什麼したかね、』

道之助はもどかしそふに問ふた、幸一は泣き腫した眼をしばたゝきながら、

『原さん……家のお母さんはし……死んで仕舞つたの、』

『エッ死んだッ……、』

其儘道之助は幸一の手をとつて、走る樣に菊坂を下りて行つた、狹い横丁へ這入ると、およしが母を呼びながら泣いて居る聲が幽かに聞えた、道之助はもどかしく

なつて、幸一の手を放して走つて行つて戸を開けると、沁と頭に浸む樣な香の匂が鼻をついた、薄暗い片隅に近處の人々が二三人集つて、およしを擁して頻りと慰めて居た、

およしは道之助の顏を見ると、やにはに走つて來て、

『原さん……、』

恁ふ言つたきり續く言葉もなく、道之助の手に縋つて泣き崩れた、道之助はそれを慰めて居る遑はなかつた、およしの手を振り切る樣にして、母の屍體の傍に寄つた、而して顏に當てゝあつた手拭を退けた、母は何の苦痛の跡もなく、夜前姉弟の身を賴んで、道之助の快諾を聞いて、如何にも嬉しそふな笑顏を其儘、痩れ果てた頰邊に殘して、安らかな眠りに入つて居るのであつた、

『小母さん……道之助です、』

恁ふ言つて凝と母の顏を覗視て居た道之助は、其儘堪らなくなつて屍體の側に打

伏して仕舞つた、其内に近處の人々は密々と話しながら、何時の間にか出て歸つて仕舞つた、暫くして道之助は頭を上げて涙を拭ひながら元の樣に、母の顏に手拭をかけた、而して枕元にすり寄つて香を燻いた、

道之助は思ひ出した樣に、始めて泣き伏して居る姉弟の傍に寄つた、

『よしさん、幸一君、僕は何とも言へん、』

恁ふ言つて道之助はまた溢れ出づる涙を拭つた、而して心の丈、可憐な二人を慰めてやろふと努めた、而して二人が恁ふした中にも少しでも力になる樣な言葉を言つたが、自分ですら遣瀨ない程、其言葉が出なかつた、

『けれどもね、よしさん、恁ふなつた上はあんた方の體こそ大切だからねい、心配せずに、今迄のあんた方の孝行は、什那にお母さんだつて滿足して居られるか知れないんだから……それを思つて諦めなさい、而して此上だつて、決して心配する事はないよ、あんた方の美しい心は天が知つて居る、また僕も昨晩言つた通り

僕は君等二人は眞の兄弟と思つて居るんだからね、僕は一身にかげて御力になるからね、マア心を落さずにね、』

漸くの事で道之助は、此れだけの極めて曖昧な言葉を出した、およしは漸く頭を上げて、

『原さん……何卒御助け下さいまし、』

涙を呑み込みながら細い聲で言つた、

『助けるも助けんもないよ、だから今も言ふ通り僕はあんた方を、眞の兄弟と思つて居るんだからね、よしさんも其積りで居て下さい、』

『も勿體ない事で御座います、』

恁ふ言つておよしは、また思ひ出しては幽な聲を上げて泣くのであつた、

『三十五』

道之助は彼れ此れと奔走して其翌日、兎も角にも一通りの式を濟ませて野邊の送りも濟んだ、

夫れからはおよし姉弟は、淋びしい中にも篤い道之助の親切に、それ〳〵の忌日の追善も濟ませて丁度母が死んでから一月目に姉弟は、根津千駄木の邊に、或る植木屋の二階を借りて引移つた、

世に捨てられた可憐な姉弟を救ふ神は道之助であつた、此の方針も素より道之助の指圖だ、けれども恁ふした方針をとるに就ては、およしの希望もあつたからの事で、それは自分の家には財産のあると言ふではなく、殊に今迄は母の看病に、自分から夕刊賣りに出て居つた始末であつたから、幸一を學校へ上げると言ふ事は思ひも寄らない事であつた、けれどもおよしにしては、幸一を滿更の職人にもしたくない、其當時大工の棟梁を張つて、下谷の加藤と言へば多少人に知られた先祖の程に行かなくとも、切めては人の先きに立つて、働くだけの職人にしてやりたい、それ

には矢張り一通の學問がなければならぬ、夫れを思ふと自分は什那苦勞をしても好いから何とかして、幸一を切めて小學校丈も卒業させたい、夫れが切めてもの死んだ兩親や先祖へ對しての孝行である。

恁ふした考へが絶へずおよしの頭を往來して居た、で先頃道之助が、姉弟が此れからの事に就て相談した時に、およしが持ち出して言つたのであつた、

此の考へは道之助の頭にもあつた事であつたので、およしの美しい理想に大に賛成した、而して此れも道之助が奔走で、およしは根津近間の某工場へ出る事、幸一は姉の手助をしながら此れも近間の小學校に通ふ事に手續も濟ませて、扨てこそ姉弟が此の千駄木に來たのである。

此處へ來てからは、通道でもあつたので、道之助は學校の往歸りに立寄つた、今は道之助より外に頼るべき人もない姉弟は、何時も其頃になると交る〳〵窓から頸を伸べて待つて居ると言ふ風であつた。

幸一は子供ながらも、自分を學校へ出して呉れる爲めに、姉が恁ふして夜を日に續いで働いて呉れるのだと思ふと、一心になつて姉の手助をする氣になつて、必ず姉の歸る頃には火を燃して待つて居た。

今日もいつもの樣に幸一は、自分の丈より高い箒を重そふに使ひながら室を掃除して仕舞つて、七輪に火を燃しかけて居ると、およしは歸つて來た、梯子段の音がすると、幸一は團扇を持つた儘戸際まで走り出て、

『姉さん寒むかつたろふ、』

『寒くないわ、幸ちやんまた炭を燃して居て呉れたの、有難ふよ、』

幸一は嬉しそふに、

『僕ね、早く燃そふと思つても中々おこらないんだもの、』

およしは其内にショールを取つて、傍の釘にかけた、

『あの原さんは、御歸りに御寄りにならなかつたの、』

『あの、寄らなかつたよ、』

『そふ、ちやまだ御歸りにならないのかしら、』

およしは七輪の火を直しながら、凝と考へると言う風であつた、暫くしておよしは思ひ出した樣に、

『幸ちやん、今晩はね、活動へ行つて來ると好いわ、土曜日だから、』

何日か道之助が買つて來て呉れた幼年の友を讀んで居た幸一は、姉の顏を見上げて、

『好いよ、此間行つて來たばかりだもの、』

『好いのよ、幸ちやんがね、大變手傳つて呉れるから、姉さんが御褒美におごつて上げるのよ、早く御飯食べて行くと好いわ……冷の御飯だけど、此儘食べ樣ね、』

『ア、僕冷の方が好きだ、』

『其代り幸ちやんの好きな目差を燒て上げるわね、』

言へながらおよしは、戸棚から目差を出して七輪の上に乗せた、

『幸ちやん、見て居て頂戴な、』

恁ふ言つて其内におよしは膳立てをした、恁ふして姉弟は睦しそふに夕餉を濟ませてから、幸一は活動寫眞に出かけた、後でおよしは四邊を片づけて仕舞つて、七輪から火鉢へ火を移して、鬚のほつれをかき上げながら火鉢の前に座つた、而して何事か凝と考へるのであつた、それで居て何となくそわ〳〵しく落附かないと言ふ風であつた、而して時々窓を開けては上下と眺めた。

『什麼して今日は御寄りにならなかつたのかしら……また御歸りにならないのかしら……、』

恁ふ言つてはまた凝と考へ込んだ、而しては下の入口の開く度に凝と耳をすました、其度毎に幽かな動悸が胸を打つのであつた。

『御勉强で御忙しいのかしら……そうだ屹度そふだ、そふに違ひないわ、』

およしは强て恁ふ斷定して、慌てた樣に編みかけの靴下を取り上げた、而して一心に編んで居る……と思ふと何時の間にか手が止まつて居て、矢張り先きの思ひを一心に辿つて居る、

『まア、私什麼したんだろふ……原さんに今晩是非來て頂かなきやならない樣な用もないんたのに……して見ると唯來て頂けば好いのかしら……什麼して來て頂けば好いのかしら……什麼して今晩來て頂けないのが氣になるんだろふ……矢張り……戀……まア飛んでもない、』

およしは慌てた樣に頸を上げて、四邊を見廻した、

『私什麼して此那氣持になつたんだらふ……精出して仕樣、』

およしは觸り言ながら、再び編み物を取り上げて編みにかゝると、下の入口の戸が開いた、およしは手を止めて耳を欹た、同時に幽かな動悸が起つた、其内に快活な道之助の聲が、二言三言聞えて梯子段を踏む音が聞えた、およしは幽かな微笑を

浮べて、慌て四邊の塵屑を拾つて、戸棚の上の鏡に向つて髪のほつれをかき上げて
また火鉢の前に座つて、強て冷靜を裝ふと言ふ風であつた、
其内に道之助は上つて來て、戸を開けた、
『今晩は……イヤ寒い〳〵』
道之助は、帽子を壁際の釘に掛けながら、火鉢の傍に寄つた、
『幸一君は……』
『アノ活動寫眞へ……、』
『活動……なるほど土曜だね、』
『大層今日は御遲ふ御座いました事、』
『今日は一寸調べる事が有つて……、』
『多分お忙しくつて入らつしやるんだらうと思つて居りましたけれど……、』
およしは言へながら、戸棚から茶器を出して揃へた、

『何分忙しいので困るよ、今度は兎に角卒業の事でも有るしね、』
道之助は、およしが注いで出した茶を啜りながら言つた、
『それにつけても、私共までが余計な御心配をお掛け申しまして……、』
『また始めたね、兄妹がお互に心配するのは何でもないぢやないか、よしさんは其
那積りで居るのかね、』
『そふぢやないんですけれど……其れはそふと原さん、お寫眞は既う……、』
『ウム今日出來て來たよ、』
道之助は袂を探つて、一枚の寫眞を出した、
およしは嬉しそふに受取つて、凝と眺めながら、
『マア御立派に……此れを頂へて置ひてよろしいのでせうね、』
およしは言ふなり懐へ入れた、そして密つと道之助の顔を見上げた、

『三十六』

數へて見ると、十年に近い昔の事となつた、道之助は上り詰めた坂から見送る樣に越方を繰り返して見ると嘸夢の樣な世ではある。

乞食の境涯にまで落冷れた身を、情ある而かも緣由ある謙太郎に救れて以來、何不自由もなく殊には富美子の篤い心に慰められて、此れも恩人への報恩と、專心に勉强した結果は、今度の卒業試驗に、見ん事最優等の成績で帝國大學を卒業した、そして目出度く法學士の肩書を貧ふ事が出來た。

自分の嬉びは勿論、謙太郎や夫人や富美子は、せめては原先生への萬分一の御恩報じが出來たと言つて嬉んだ。

恁ふした中にも道之助は一日として欽二の行衞を案じない日とてはなかつた、殊に自分が今度の樣な成功を遂げて、自分も嬉び他の人々に悅ばれるに付けても、今

更の樣に欽二の事を思ひ出して、また新しい涙に暮れるのであつた。

證書授與式が濟むと其日から、曰く何會、曰く何會と續いて、家にくづろぐ暇もなかつた道之助は、數日を過ぎて漸く暇になつた、謙太郎は夫れを待ち兼ねた樣に夫人や、道之助や富美子や、それに德三を供に原家の墓參に行つた。

二三日前から德三が毎日の樣に來ては掃除して置たので、四邊には塵一本止めて居ない。

謙大郎は嬉びの充ちた顏に微笑を泛べて、德三の持つて來た花を受取つて、手づから花立に挿した、そして二三歩引退つて、石碑に向つて慇懃に頭を垂れた。夫人や道之助や富美子は後の方に蹲つた。

謙太郎は徐ろに頭を上げて、

『地下に在す先生や奥樣、御嬉び遊しませ、御令息道之助樣には此度、最優等の御成績で帝國大學を御卒業になりました。謙太郎謹んで御報告申上げます、』

恁ふ言つて再び頭を下げた、而して傍に退けて道之助に席をゆづつた。

道之助は徐ろに歩み寄てて、凝と石碑を注視めた。

『お父さんお母さん、お嬉び下さいまし、道之助は此度帝大を卒業いたしました、』

道之助は後の言葉を續け樣として續ける事が出來なかつた、凝と石碑を注視めた眼には早や涙が浮んで來た、果ては眼瞼を溢れて、頰を傳ふて千條と流れた、背後に蹲つて居る夫人や富美子は唯涙と共に俯向て居る、中にも德三は聲を上げて泣くのであつた。

道之助の墓參が濟むと夫人や富美子や德三やが續て禮拜した。

謙太郎は一同の禮拜の濟むのを待つて、

『今日此の御墓前で、一つ道之助と富美子に聽て貰わにアならん私の頼がある、』

恁ふ言つて謙太郎は道之助の側に寄つた。

『其れは此度道之助の卒業と共に二人が結婚する事を承諾して貰ひたいのぢや、』

此の意外な言葉に道之助は驚きの目を見張つて謙太郎の顏を見上げた、富美子は嬌羞の頸を垂れて、うつ向てしまつた。

『不足も有ろうが、道之助如何かの、』

謙太郎は重ねて問ふた、道之助は頭垂れたまゝ、

『身に餘る事では御座いますが、此の上……』

謙太郎は搔取る樣に、

『何も言わんで承諾して呉れ、謙太郎の頼みぢや、』

『勿體なふ御座います、では失禮では御座いますが御言葉に……』

『承知して呉れるか、其れで富美子にも異存はあるまいの、』

『ハ……イ』

富美子は殆ど聞きとれぬ程の聲で答へた。而して二人の頰邊には押へ切れない嬉びの色が明々と浮んだ。

『イヤ二人共承諾して呉れて私は誠に滿足ぢや』

恁ふ言つて謙太郎は再び石碑の方に向た。

『只今御聽きの通り、二人共快い承諾をして呉れましたに就きましては、先生や奥様にも萬事謙太郎に御委せ下さいまして、御承諾下さいます様、御願致します、』

恁ふ言つて猶道之助を此後進んで歐州へ洋行させると云ふ事を語つた。

今は恁ふした嬉びに充ちた墓參も濟んで一同は欣然として歸路についた。

道之助は其れから間もなく歐州へ向けて遊學の途に登る事になつた、と同時に道之助と富美子の結婚の内約は堅く結ばれたのであつた。

『三十七』

兎や斯うと言つて居る内に、もふ道之助が歐州へ出發する日は四五日に迫つた。

道之助は夕方から出て、谷中の墓地へ行つた、そして墓參が濟むと、其足で小石川の音羽に居る友人の處へ、所要旁々暇乞に行つた。

直ぐ歸へらうと思つたのが、友人や家内の人達に無理に引留められて、遂三四時間話して歸つた、友人の家を出る時は、もふ十時を過ぎて居た、友人は江戸川終點まで送つて來た。

『どゝ二三年は一緒に歩行けんと言ふ譯だね、少し歩行うぢやないか、』

二人は江戸川橋から電車道に沿ふて、石切橋まで來た。

『もふ別れやう、何處まで行つても同じ事だ、僕も失敬するよ、』

『然うだねい、ぢや失敬しやうか、』

恁う言つても、友人は中々歸ろふともしない。

『ヲイ歸つて呉れ給へ、もふ好いよ、一人で乘れるからハッ〳〵〳〵、』

道之助は恁う言つて快活に笑つた。

『イヤ兎に角見屆けん内は歸れん、』

『御心配御無用、』

『マア〳〵遠慮せんでも好いよ、僕はどうせ此の先の度量衡屋とパン屋へ寄つて、買ひ物が有るんだから……、』

『何を買ふのかね、』

『尺指を買ふんだ、』

『妻君の御用だね、奥方の御用は眞面目に勤め給へ、年末賞與が澤山出るからねハツ〳〵〳〵、それにしてもパン屋は什麽したんだ、』

『ウム、近頃胃をこはして居るので、朝食は食パンと云ふ譯さハツ〳〵〳〵、』

二人が微醉に浮かされて喋舌て居る間に、電車は幾臺か往來した。

『兎に角歸つて呉れ給へ、僕は最う少し歩行く積りだから……大分酩酊した、』

『然うか、ぢや失敬しやう、いづれ出發の日は行くから、ぢや此れで失敬するよ、』

『左樣なら、御令閨によろしく、』

『五軒町で乘るのか、』

『さア、何處で乘つたら好いか、』

『精々大曲邊りで乘り給へよ、』

恁う言ひながら友人は、橋を渡つて度量衡屋の方へ行つた、そして二人は、互に見返りながら暗の中へ入つてしまつた。

道之助は友人と別れてから、微醉のまた眼瞼の邊に充血して居る顏を、快い夜風に吹かれながら、東五軒町から狹まい橋を渡つて、向側の通りを大曲の方に辿つて居る、そして一際小暗い所へ來ると、川端の柳の根方に一枚の莚をたよりに、小さな提灯を前に置いて、ゆるんだ樣な三味の調子を其の儘に、滅入る樣な聲を上げて新內を唄つて居る年老いた女が居た。

道之助は一足行き過ぎて振り向ひた。

『旦那樣、一節唄はして下さいまし、』

恁ふ云ふ聲も既に涸れてゐる、道之助は何とはなく憐れつぽい氣持ちになつて、寄るともなく寄つた、老媼は道之助の寄つたのを見て、如何にも嬉しそふに、ピーンと撥を當てた。

『唄はんでもよろしい、』

道之助は恁う言ひながら、凝つと老媼の顏を見ながら、

『姥さん、お前は毎晩此處へ出るのかね、』

『ハイ、毎晩出るには出るので御座いますけれど……、』

『住宅は此の近處かね、』

『ハイ直ぐ此の先きで御座います、』

老媼は恁う言つて、凝つと道之助を見上げた、道之助も亦凝と老媼の顏を注視めて居た眼を、急に見張つて思はず進み寄つた……何者かを見付とた樣に……

『若し貴女は麹町にゐた事はないかね、』

『ハイ麹町には、長い事居りました事が御座いまして、』

『ナニ居たことがある……、』

『ハイ五六年前までは麹町の下六番町に居りましたが、』

『ぢや違つたら失禮だが、貴女は……原……とは言はんかね、』

『ハイ原と申しますが……、』

『ヲッ伯母さん……、』

道之助は慌てた樣に帽子をとつた、

『伯母さん久濶でした、お忘れかも知れませんが、僕は道之助です、』

『エッ、』

老媼は恁ふ叫んで其まゝ逃げ出そふとした、道之助は手早く袖を取つて引止めた

實に此の可憐の老媼こそは、道之助には伯母に當る、原團藏の妻であつた。

『面目ありません、何卒御放し下さいまし、御慈悲で御座います、』

『伯母さん決して御心配は入りません、まア什麼したんです、一通り聞かして下さい、伯父さんや安三さんは什麼しましたか、』

道之助は袖を摑んだまゝ問ふた。

『何卒此儘、何も問かずに御放し下さいまし、御慈悲で御座います、』

『マア伯母さん、決して御心配下さいますな、是非一通聞かせて下さい、實は御別れ致しましてから以來、御詫び旁々麹町の御宅へ御尋ねした事もありましたが、其時は既に麹町には入らつしやらなかつたので、實は何處に御出での事かと思ひまして、始終御尋ねして居つたのです、決して御心配なく……、』

道之助は、恁ふ言つて無理に引き留めた、

『全體如何したんです、其の御姿は……、』

伯母は如何にも極り惡るそふに、

『道さん……面目も御座いません、』

『伯父さんは什麼して在らつしやるんですか、』

『ハア伯父は、唯今病氣で……、』

『エッ病氣で……安三さんは、』

『……彼れに就ては御話の仕樣も御座いません、私共が此那難義をして居りますのも、實は彼れの爲めで御座います、』

伯母は早や流れる涙を拭ひながら、細い聲で言つた、

『好い處で御目にかゝつた、いづれ御宅までお伺ひ致しませう、』

『本來なら是非にと、申上げるので御座いますけれど……とても御出で下さいましても……、』

『イーエ決して御心配下さいますな、さア乘りませう、』

恁ふ言つて道之助は、逡巡して居る伯母の手を取つて引き立てた、

伯母は止むを得ぬと言ふ風で、破れかけた三味線を、卷いた菰と一緒に抱ひ込む

樣にして立ち上つた。

『御宅は何方ですか、』

『遂此先きの水道町で御座います、』

二人は連れ立つて歩み出した。

拒む伯母を先きに立たせて、道之助は伯父の家を訪ふ可く、水道町まで來た、濕め〳〵した細い横町を、怪げな臭のする下水に沿ふて、迂廻した道を突き止まりまで行つた、其處は伯父の家であつた、

『此家ですか……一寸御待ち下さいまし、』

伯母は恁ふ言つて、一足先きに家内へ這入つた。

道之助は表に立つた儘四邊を見廻した、而して心の中に舊麹町の邊に構ひた巨宅と比較して、漫に憐れを催した。

『何卒御入り下さいまし、』

恁ふ言つて伯母は戸際まで出迎へた、道之助は待ち兼ねた樣に中へ這入つた、見ると狹苦るしい而して陰鬱な室の片隅に枯瘦の身を横へて居るのは伯父の團藏であつた、道之助は驅け上る樣にして伯父の傍へ寄つた。

『伯父さん、久濶でした、道之助です、』

恁ふ言つて道之助は伯父の顏を覗ひた。

伯父は見るかげもなく瘦せ衰いた顏を半ば布團に埋めた儘、

『道之助か、あゝ面目ない許して呉れ、』

恁ふ言つて、伯父は遂に顏を布團の中に埋めて仕舞つた。

『決して御心配下さいますな、』

道之助は言ひながら、恁ふした憐れな姿を見ては、今とて忘れもせぬ幾年前かの虐待された記憶も、今は思ひ出す暇もなく、せぐり來る涙を拭つた、

『伯父さん、決して御心配下さいますな、僕は決して以前の事を思ふのぢやありま

せん、實は御別れ致しましてから、或る人に助けられまして、漸く此秋帝國大學を卒業致しまして、近い内に獨逸へ行く事になつて居りますので、實は夫れ前に一度御目にかゝつて嬉んで頂こふと思つて、今日が日まで御探し申して居つたのです、決して御心配下さいますな、それはそふと什麽してまア、此ん那御境涯に御なりになつたのですか、』

恁ふ言つて、道之助は今更の樣に四邊を見廻した、團藏は唯、

『道之助……面目ない、私ァ御前から伯父と言われるのか面目ない、』

恁ふ言つて涙を拭ふばかりであつた、伯母は傍から、

『道之助さん、私共が今更人間の皮を被つては、御話申されるのぢやないのですけれど……獣の言ふ事と思つて一通り御聞き下さいまし、』

恁ふ言つて伯母は膝を進めた、

『實は彼れから以來と言ふものは、する事、なす事、手違ひにばかり行きまして、

其内に泣き顏に蜂とやら、忘れもしない今から八年ばかり前、一寸とした手違ひから宿主が二年の懲役、漸く出獄したと思つた頃に、最早家屋敷すら自分のものでは御座いませんでした、』

恁ふ言つて伯母は涙を拭つた。

『其内に御存じの安三で御座います、彼れがまた、蛙の子は蛙のたとひに漏れず、また肩揚のとれない内から惡るい事を覺え、無い中の金を持ち出しては遊び廻つて、手も足もつけられない無賴者になつて仕舞ひましての上句が、つひ御上の御厄介、此れも一年の懲役と言ふ事になりまして……其内に父は其れを苦に致しましたのが原因で、遂々此の病氣で御座います、』

此まで語つて、伯母は瀧なす涙を拭つた。

『其ふ斯ふして居ります内に、漸く安三が出獄して參りましたので、此度こそは少しは心も直つたかと思ひの外、以前にも増して放蕩三昧、遂々昨年の暮れに病氣

の親を捨てゝ家を出た儘、行衛不明、今は什麼して居るものやら……、』

幽かな聲を上げて泣いて居た伯父は、慌てた樣に頸を上げて、

『此れ、何を言ふか、彼那犬にも劣る者、もふ言ふでない〳〵、』

『本當にそふでした……彼那親不孝者、思ふまい、考へまいと思ましても遂……、』

伯母は堪らなくなつて、其儘泣き伏して仕舞つた、道之助は涙を拭ひながら、

『伯母さんよく仰つて下さいました、イヤ安三さんも其の內には戻られませうから……また僕も御目にかゝつた上は及ばずながら……致しますから、』

恁ふ言つて道之助は伯父と伯母の顏を見注めた。

恁ふした奇しき邂逅に、長い話は續いて彼是十二時も近かゝつた、道之助は持ち合の若干金かを出して、强て拒む伯母に渡して伯父の家を出た、

伯母は戸口まで送つて出て、手を合せて道之助の姿の見えずなるまで伏し拜んだ。

『三十八』

道之助が歐州へ向けて、東京を出發する時は來た、道之助の行を送ろうとして、新橋へ集まつた親族知己は無慮數百人を數へた、中には今度道之助の洋行を報導した新聞を見て、始めて道之助が原家の人と知つて來た人も少なくなかつた。

今し方、道之助は、謙太郎や富美子と、それに德三も同乘で、馬車を驅つて新橋停車場にやつて來た、後からも數十臺の人俥は踵を次で驅けつけて來て、道之助等の乘つた馬車が着くと、多くの見送人は等しく出迎へて、道之助の下車を待つた。

道之助は希望に充ちた、そして生々した顏に快よい微笑を泛べて馬車を下りた、そしてそれ〴〵挨拶をしながら、人々に擁せられて一等待合室へ入つた、それかれは親族や極く親しい友人やが、入り替り立ち替り挨拶に來た、それも漸く途絕て、ホツとする間もなく、年若い驛夫が這入つて來て、

『間もなく發車致しますから、御用意なさいます樣に』

恁う言つて出て行つた、道之助は衝と立ち上つて、

『ではお父さん、』

道之助は恁う言ひながら、謙太郎の傍に寄つて手を握つた、

『お父さん、それでは行つて參ります、御機嫌よう、』

『ヲもう行くか、確かりやつて來て呉れ、二年と言ふても直ぐぢや、第一身體を壯健にのふ、』

恁う言つて謙太郎は、道之助の手をしつかりと握つた、そして謙太郎の目には、もふ涙が浮んで居た、道之助は徐ろに謙太郎の手を離れて、今度は富美子の手を握つた、

『富美さん御機嫌よう、お母さんにもよろしく、』

『兄さん……御身大切にね……、』

富美子は俯いたまゝ恁う言つてハンケチを嚙んだ、そして握つた富美子の手は强く顫へた、

道之助は再び富美子の手を離れて、先刻から目に手拭を當てゝ、蹲つて居た德三の肩に手をかけて、

『ヲイ德三行つて來るよ、お前も大丈夫で居て呉れ、なアに二年と言へア直ぐだ、お前も年をとつて居るんだから、身體を大切にね、』

『ヲヽ行かつしやるかッ、みゝ道之助樣御身體御大切に……何でも外國は大層氣候が違ふそうで御わすから……爺やも此れもふ……寄る年波でも御座りますで、御戻りになるまで早や……、』

『ヲイ德三、つまらん事を言ふな、其那弱い事で什麼する、大ひに强い氣を出してね……、』

恁うした濕した挨拶の中に時間は經つて、再び先刻の驛夫が入つて來て急を告ぐ

た、と共に、けたゝましく報鈴が鳴り出した、

漸く道之助は告別を濟して、再び多くの人の中を、プラットホームへ出た、そして多くの人の間に起る、萬歳の聲に最後の訣別を告げて、列車の中頃に連結されてある一等列車の内に這入つた、そして窓から半身を出して、プラットフォームに滿ち充ちた見送り人を見渡した、そして今し最後の訣別を告げ樣として、再び上から下へ見渡した時、道之助は何者かを見出した樣に、驚きの目を見張つた……其目には遙かの彼方、プラットフォームの外に圍した柵を頼りに、延び上る樣にして頻りにハンケチを振つて居る、およし姉弟が映じたので有つた、

『ヲ、此處まで來て居て呉れたのか、』

道之助は心の中に恁う言つて、言葉を交す詮もなく、同じくハンケチを振つて、餘他ながらの告別をした。

瞬間、道之助を乘せた列車は盛んな送辭に送られて、再び湧く歡の聲に送られて

一聲の汽笛と共に新橋を離れるのであつた。

『三十九』

唯一人の頼るべき人は遠く外國へ遊學の身となつて、後には姉弟二人他に頼る人もなく、淋しい中にも唯、あれは那樣此れは此樣と、道之助が旅立つ前の晩來て詳々と敎へて行つて呉れた方針を定木に、およし姉弟は、唯何事もつゝましやかに、仲睦しく暮して居る。

今迄一心に編物をして居たおよしは、手を止めて時計を見た。

『もう九時、幸ちやんは未だかしら、』

およしは立ち上つて、窓の戸を開けて通りを眺めた。

『早く歸つて來れば好いのに、』

およしは獨り言ちながら、凝と冴いた空を眺めてゐると、いつともなく明々と道

之助の姿が、目先へ浮んで來て、いつも恁うして窓に寄りかゝつて、道之助の來るのを待つた事を思ひ出した。

『今頃什麼して入らつしやるかしら』

言ひながら、其れから其れへと思ひを辿つて、最後に悲しかつた新橋の別れを思ひ出すと、およしは譯もなく悲しくなつて、ッ、と窓の戸を締めて元の座に戻つたそして戸棚の抽出から、大事そふに包んだ道之助の寫眞を出して、凝と眺めて居ると、夕方から白山上の停留場へ夕刊賣りに行つた幸一が戻つて來た、およしは慌てゝ元の處へ寫眞を收めて立ち上ると、幸一は下から上つて來た。

『姉さん……』

幸一は如何にも慌てゝ居る調子で、火鉢の側に寄つた。

『何に、』

『姉さん、私澤山な……』

幸一は四邊見廻しながら、懷に手を入れた、そして聲をひそませて、

『私ね、澤山なお金を拾つて來たの、』

『エッ、お金ッ、』

『ウ、澤山だよ、』

恁う言つて、幸一は懷から、黑皮の小形の鞄を出した。

『マー、』

およしは驚ひて鞄を受取つて見た。

『マア隨分重いのね、中を見たの、』

『イーヤ見ない、』

『何處で拾つたの、』

『アノそら權現樣の前に坂があるだろふ、』

『エ、』

『あの坂の上なの、』

『マア……、』

およしは怖いものゝ様に、幾度か裏表と眺めて、

『中を見ても好いわねい、』

『好いよ、』

『若し落した人の名でも書いた物があるかも知れないから、』

およしは恁ふ言つて、恐る〳〵中を開けた。

『マア隨分澤山なお金ね……』

言ひながらおよしは、書類を取り出そふとして驚愕の目を見張つた、およしは外國封筒の裏に、原道之助の名を見出したのであつた。

『原さんから、』

およしは叫ぶ様に恁ふ言つて、其封筒を取り出して表を見ると、宛名は住吉謙太郎であつた。

およしは尙ほも中を調べて見ると、其外にも謙太郎の名刺や、謙太郎の名の記されてある書類が二三點あつた、でおよしは此鞄の落主は、間違ふ方もなく謙太郎であると斷定した。

『幸ちやん、此れを落した方は解つたわ、』

『誰なの、』

『原さんのお父様だわ、』

『ウーム住吉さんだな、』

『マー不思議ね、だけど好い事したわ、』

およしは元の様に、其封筒を鞄の中へ收めながら時計を見た。

『まだ九時半ね……今晩お屆けして來やうかしら、』

『明日の朝でも好いぢやないか、』

『そふね……だけど今晩の方が好いかしら……』

およしは凝つと考へて、

『幸ちやん、矢張り今晩の方が好いわ、一時間でも早い方が、』

『そふだなア、』

『ぢや私行つて來るわ、直ぐ歸つて來るからね、幸ちやん寢て居ると好いわ、』

恁ふ言つて、およしは鞄を風呂敷に包んで、羽織の間に挾んで其儘下に降りた。

『四十』

青白く光つて居る瓦斯の軒燈の下に佇立だおよしは、住吉と記した標札を眺めながら身の廻りをつくろひなどして淑やかに、脇の方の潜戸を開けて這入つた、而して敷石傳ひに玄關へ行つて見ると、幸ひに未だ戸が開いて居た。

およしは四邊見廻しながら、恐る〳〵呼び鈴を押した、暫くすると、内から戸が

開いて自分と同じ年頃の女が顔を出した、およしは慇懃に腰をかゞめながら、

『住吉様の御屋敷は此方様で御座いませうか、』

『ハイ……どなた様で入らつしやいませうか、』

『あの……少し……旦那様にあの……御目にかゝつて……、』

およしは途切れ〳〵に言つた、女中は不思議そふにおよしの顔を眺めて、

『ハア貴女様はどなた様で入らつしやいませうか、』

『あの……私は加藤よしと申す者で御座いますが……あの御屋敷の旦那様かと思われますが……何か……今晩御紛失物をなさりは致しますまいか、』

『あの紛失物……、』

女中が恁ふ言つて驚きの目を見張つた、而して凝とおよしの顔を見注めた。

『何か御心當りでも……、』

『ハイ、』

『マア左様で御座いましたか、實は今日宅の旦那様が紛失物をなさいまして……、』

あの一寸御待ち下さいまし、』

女中は其儘奥へ駈け込む様に入つて行つた、其間およしは外に立つた儘道之助の事など思ひ出して、唯譯もなく此の家が懐かしい様な氣がした、暫くすると、以前の女中は再び駈け出して來た。

『失禮致しました、何卒此方へ御上り下さいまし、』

女中は如何にも氣輕い調子で招じた。

『あの失禮で御座いますから……此處で結構で御座います、あの御紛失物は……、』

女中は手を取る様に、

『イーヱ此處では御話もなり兼ねますから、何卒此方へ、』

『左様で御座いませうか、』

およしは止むを得ぬと言ふ風で、恐る〳〵上つた、而して女中に導かれて客間へ

通つた、女中は座布團を招じて置いて再び退つて行つた。暫くすると先きのと變つた女中が火鉢や茶を運んで來た。

『只今主人が御目にかゝりますから……、』

恁ふ言つて女中が下ると、引き違ひて謙太郎が這入つて來た、およしは隅の方に堅まつた様にして、挨拶をした。

『イヤお始めて……さア御敷なさい、』

恁ふ言ひながら謙太郎は女中が敷て行つた褥の上に座つた、而して火鉢に手を翳しながら、

『さア御敷なさい、時に紛失物に就て……御心當りがあつて、御出で下さいましたそふで……イヤ實は飛んだ粗忽をして……今晩小石川からの歸りに鞄を落したのですが、何か御心當りでも、』

『ハイ、あの御紛失遊ばした御品は……あのどんな御品で御座いませうか……、』

『ア、其品は鰐皮の小形の鞄でしてな、中には書類が五六點入つてある筈でした、金は左樣……何しろ大した金ではなかつたのですが……左樣二百圓ばかりあつた樣に覺えましたが、』

『左樣で御座いますか、』

恁ふ言つて、およしは布呂敷から鞄を出して謙太郎の前に出した。

『それでは此の御品が……、』

謙太郎は鞄を取り上げて、

『そふ〳〵、此れに違ひありません、イヤ此れは實に有難い事でした、而して什地で御拾ひになりましたな、』

謙太郎は鞄を其儘前に置いて問ふた。

『あの……私の弟が、今晩餘地から歸つて參ります時に根津の權現樣の前の……坂上で拾つて參りましたので御座います、』

『ナニ弟さんが……、』

『ハイ、それで御失禮とは存じましたが、お落し遊ばした御方の御姓名を書いた御品でもあればと存じまして、一寸中を拜見しますと……御宅樣の樣に存じましたので……、』

『そふでしたか、イヤ御蔭で手に戻りました、金は兎も角として、一寸重要な書類もありましたので、實は今此れから屆を出そふと思つて居た處でした、イヤ御蔭で安心しました……ア誰か居らんか、』

幽かに女中の答た、聲が聞えて間もなく以前の女中が來た。

『奥にの、一寸來る樣に、』

『畏まりました、』

女中は其儘退つて行つた、間もなく柔和な顏に、快よい微笑を泛べて、夫人はしとやかに入つて來た、謙太郎は夫人の方に向ひて、

『此方が鞄を拾つて下すつてのふ、態々持つて來て下すつたのぢや、』
夫人はおよしの方を向ひて、慇懃に頭を垂れた。
『左樣で御座いますか、始めて御目にかゝります、マア態々御持ち下さいまして、御蔭樣で御座いました、さア御敷き下さいまし、』
謙太郎は夫人の挨拶の濟むのを待つ樣にして、
『時に御宅は何地ですな、』
『ハイ根津の千駄木で御座います、』
『御兩親は壯健ですか、』
『イーエ……兩親とも御座いません、』
『御兩親がないな、御兄弟は、』
『弟が一人御座います、』
『弟さんが、ア、此れを拾つて吳れた方ですな?』

『ハイ、』
『而して御親類へでも……御出でになるのですか、』
『イーエ、』
謙太郎は稍不審そふに、およしの姿を眺めながら、
『ぢや御姉弟で御家を……、』
『イーエ弟と二人で間借りを致して居ります、』
『何、間借りを……ではどなたか御世話なさる方でも……、』
『ハイ……イーエ、』
およしは慌てた樣にして打ち消した。
そして盜み見る樣に謙太郎の顏を見た、謙太郎は白髯を撫でながら、改つた樣な調子で、
『如何ですか、一つ御身の上に就いて御話下さいませんか、事によつては失禮なが

ら……』

『有り難ふ御座います……身の上と申しましても……誠に失禮では御座いますが、それでは……』

およしは恁う言つて、父に別れて間もなく、母が病氣になつた事、それから姉弟二人、弟は夕刊を賣り、自分は砲兵工廠に出て、病母を看護した事、母の死沒後は根津千駄木町に小さな間を借りて、自分はリボン工場に女工となつて、弟を小學校に通せて居る事、弟も亦自分を手助けして、毎夜白山上に夕刊を賣りに出て居る事實は今晩鞄を拾つたのも、其の歸へりであつた事、自然に泛ぶ涙と共に物語つた、謙太郎や夫人は、時々鼻を啜り上げて聞ひてゐた、夫人はハンケチで涙を拭ひながら、乘り出す樣にして、

『弟さんはお幾つですか、』

『ハイ九ツで御座います、』

『マア、』

謙太郎夫婦は、如何にも感心したと云ふ風であつた。

『實に感心なお心掛けぢや、美しいお心ぢや……時に恁う言つては、折角獨立獨行を續け樣とする、お強い心を挫く樣に當つては、甚だ失禮ぢやが、如何です、私はあんた方お二人をお世話し度いと思ふが、』

恁う言つて謙太郎は、およしの俯向ひた顏を覗く樣にして注視た。

およしは恁うして、鞄を拾つて届ける事が、既に道之助の家に出入する事が出來ると思ふ嬉しさの上に、今自分等姉弟の世話をして呉れる、何と言ふ幸福なんだらふ、と、およしは押へ切れない嬉しみを感じた。

『有り難ふ御座います、』

唯およしは恁う言つて答へた、夫人は如何にも沁りした調子で、

『御都合がお惡るくなければ、明日からでもね、お二人とも宅へ來て頂いて、弟さ

んは毎日學校へ通ふ樣に、またあなたには家の事を手傳つて頂く樣にね、然うなすつては如何で御座います、』

謙太郎も傍から言葉を次で、

『御都合さへよくば然うなさい、決して遠慮はいらん、』

恁うした情ある夫妻の言葉に、およしは涙と共に感謝した。

『では明日からでも御宅を引拂つてね、何なら家の女中をお手傳ひに上げましようか、

『イーヱ引拂ふと申しましてもホ……』

『ではいづれ、明日の午後に車夫を上げますから、御要意をね』

恁うして、夫人は引拂ふ事にまで種々とさとした、謙太郎も傍から、

『そふぢや、兎に角善は急げぢや、ハッ〳〵〳〵、時にお禮を忘れて居た、』

謙太郎は恁う言つて、鞄から百圓だけ出して、

『此れは甚だ失禮ぢやが、弟さんへお禮の印です、御納め下さい、』

『恁う言つておよしの前に出した、およしは慌た樣に押し戻して、

『まア飛んでもない事で御座います、元より御禮を頂く積りで、お屆け申した譯では御座いません、恁うして明日からは、御助に預るので御座いますもの……』

『イヤ決して遠慮に及ばん、其れはそれ、此れはこれぢや、厚意に對する謝禮は當然の事ぢや、納めて下さい、然うでないと私が困る、』

『イーヱ厚意でも何でも御座いません、御紛失物をお持ち主へお屆け申しますのは當然の事で御座います』

恁う言つて、およしは猶押し返へした、傍に居た夫人は、謙太郎の方に向て、

『如何で御座いませう、恁んなに御辭退なさるんだから……何れにしても明日からは、家へ來て頂くのですから、其上でそのお金丈を御姉弟の御名前で、銀行へでも預けて置いて上げては……』

『ウム成る程それがよからう、ぢや今晩は一先私がお預りして置いて、明日にも銀

行へ預けて上げやう』

謙太郎は恁う言ふて押し戻さうとした手を引いた。

およしは思ひ出した樣に、襟かき合せて暇を告げた、謙太郎や夫人は、玄關まで見送つて呉れた。

『では明日は成可くお早くね、入らして下さいまし』

夫人は玄關の外に出たおよしに言つた。およしは向直つて、慇懃に頭を垂れた、そして夢の樣な嬉しさにあこがれ乍ら、歸路を急いだ。

『四十一』

時は水の流れる樣に過ぎて、遂昨日と思つた道之助の洋行も、茲に二年有半の日を送つて、愈歸朝する事となつた。

道之助を乘せたアジヤ號は墺國の港を出帆して以來十數日の海路も無事に、丁度

眞圓な月が空低く懸つて浪穩な夕べ、シンガポールの港に寄港したのであつた。

給仕は一室毎に、船は明日の午後九時まで滯在と云ふ事をふれて廻つた、數日來小暗ひ船底に、無聊と鬱氣とに閉ぢ込められた多くの船客は、鳥籠から放された雛の群が、思ひ〳〵に散らばる樣に、棧橋に降り立つた、そして長い棧橋を町の方に歩いた、道之助も其群に交つて無意識の歩を運んで居る。

棧橋の兩側には、見慣れない印度人が、頓狂な聲を上げて、バナ、やバイナップルを賣つて居る、中には白色人や黃色人も居た。

道之助は棧橋を渡り終ると、左の方に折れる横丁に這入つて見た、そして左手に自分の乘て來たアジヤ號の、模糊とした姿を眺めながら歩て居ると、向ふから年若の而かも黃色人が、大きな籠に多くのバナ、やバイナップルを入れて、急ぎ足に來かゝるのに出合つた、菓物賣りは行き過ぎ樣として立ち止まつた、そして道之助を眺めながら、

『パイナップルは如何ですか、』

日本語で恁う言つた、無論菓物賣は、道之助の日本人なのを見たからで有つた。

道之助も恁うした處で、恁うした人から日本語を聞いたので、如何にも異樣に感じられて、徐ろに頸を廻して菓物賣の顏を見ると、それは同じ日本人であつた、道之助は凝つと菓物賣の顏を注視めながら、

『君は日本人だね』

恁う言つて道之助は言葉をかけた、菓物賣は如何にも懷しさうに、道之助の側に寄つて、

『ハア日本人です、何卒パイナップルを買つて下せいな、』

道之助は其れには答もせず、猶凝つと菓物賣の顏を注視た。

『君は既う長らく此地に居るのかね、』

『ハア大分長く居ります、もふ七年程になります、』

『七年……隨分長いね……夫にしても什麼言ふ積りで恁那處へやつて來たのかね、直接日本から此處へ來たのかね、まア話さうじやないか、此處へかけて……、』

恁う言つて道之助は、幸傍にあつたベンチに腰を下した。

『如何言ふ考から此んな處へ來たのかね、』

道之助は重ねて問ふた、菓物賣はもぢもぢしながら、

『如何と言ふ考のあつて來た譯でも有りませんが……自分が來たくて來たのぢやないのですから、』

恁う言つて其まゝ眼を落した、そして何事か考へると言ふ風で、そして何か悲しい事でも有る樣に、微かな吐息を漏した。

道之助は不審そふに、

『ぢや何かね、止むを得ん事情でもあつて……』

『そふ……でもありません、此れに就ては、中々込み入つた話が有りますが……』

寸の話には語り盡せぬ事だから、マア止しませう、』

恁う言つて菓物賣りは、頸を廻して靄の中に浮んで居る圓い月を凝つと眺めた、其眼には溢れるまでに涙が浮んで居た、菓物賣りは月から眼を離さず、

『旦那などは好い事だ、もふ十日もすれば日本の國だ、俺アは日本で生れて居ながら、もふ此れから死ぬまで、本國の土を踏む事が出來ぬい譯だ、』

菓物賣りは獨り言の樣に恁う言つて、再びガックリと頭を垂れてしまつた、道之助も頓には慰む可き言葉も出ず、共に微かな吐息を漏して眼を落した、菓物賣りは微に頸を上げて、

『旦那は今まで何國へ行つて居たのかの、』

『獨逸に居て來たんだ、』

『何年程居て……』

『二年半ばかり、』

『ぢや其れ前は日本に居たのかの、』

『ウム、それ前は日本に居たよ、』

『ぢや一ッ日本の話をして呉れませんか、今迄も日本の話が聞きてへと思つても、旦那の樣に親切に言葉をかけて呉れる人もねいのでな……、』

『イヤ日本の話もしてやろふが、什麼だ君が此の地へ來た由來を一つ話して見んかね、』

『そうさの、ぢや長い事だが、一つ話して見やうかの、』

恁う言つて菓物賣りは、もみ消して置いた、吸ひかけのシガーをポケットから出して吸ひつけた、そして稍濁つた樣な調子で語り出した。

『今から數へて見ますと十年餘りの昔となりましたが、俺アは惡い支那人の爲めに誘拐されて、支那の上海と云ふ處へ連れて來られたのが、丁度九ッの年で御ぜいました、それからは或る非道な支那人の家に賣られて、犬猫同樣三度の食事せへ滿足

に食させられた事もなく、朝から晩までならまだしもだが、夜の夜中もこきつかはれて……小兒ながらも死ふと思つた事も、幾度あつたか知りましねい、と言つても外に賴る人のないばかりか、右を向ひても左を向ひても、言葉せい通じねい人ばかり、恁うなつて見ると旦那、例之一椀の飯でも、食べさして呉れるのが矢張り主人……隨分悲しい思ひもしましたよ、だからのふ、風吹くにつけ雨降るにつけ、明けても暮れても、日本の事を思はねい日とてもなかつたよ、國に居た頃、學校の先生から聞かされた其ら彼の、安倍仲麿とやら云ふ人がのふ、天の原と讀まれた事など思ひ出しては、月夜の晩などには、俺が寢床であつた馬屋の二階の、小さな窓から月を眺めて、涙の涸れるまで泣いた事も有りましだよ、』

菓物賣りは此處まで語つて、キッと口を啜んだ、そして肉寒げな頰を傳ふて千條と流れる涙を、汚れた袖で無雜作に拭つた。

『偶には同じ日本の人に逢ふ事もありましたが、さて話をして呉れる人も御座いま

しね、そふ恁うして居る內に、また其家から外の家に賣られて、其れからと云ふものは、此處に半年彼處に一年と、賣られ〳〵て丁度今から六七年前、此の印度の國でも山奥の、或る村落の農家へ奴隷と云ふ者に賣られて來たので御座いました、此所はまた支那處では御座いましねい、支那に居た時は、日本に居て辛かつた事が、結句氣樂であつたと思つたが、此の印度へ來てからは、其辛かつた支那が戀しうありましたよ、此れを見て下せい、素より子供の事だから、堪らなくなつては向ふ見ずに逃げ出す、直ぐに引攫まる、さア其罰が恐ろしい、此れで御座います、當てられた燒火箸の跡……』

恁う言つて菓物賣は、腕や股を捲つて見せた。

『此れでも俺アは先づ無難の方で御座いますだ、中には眞紅な燒火箸を突き貫される奴が御座いますだ、そんなのは其場で即死、まア〳〵命のある丈幸福だつたので御座います、然う恁うして居る內に、天道樣の御助けか、地獄で佛と言ふ事が

有りますが、此れも朝鮮人で御座いましたが、同じ奴隷の仲間で、尤も仲間の内では親方株の爺で御座いましたが、此の爺が大層俺アを親切にして呉れましての、其内に俺アも年をとつて來ると言ふ譯で、例令ば逃げ出すにしろ、滿更無分別な事もせず、そふ恁うして丁度今から三年前、其爺の親切で遂々其處を逃げ出して、此のシンガポールまでやつて來たので御座いますだ、其れからは、什麼かして旅費を作つて、日本へ歸へらうと思ひまして、今年で三年此の菓物を賣つて居るので御座います、』

菓物賣は語り終つて、深い吐息をした。

『イヤ〳〵御親切な御言葉に甘へて、飛んだお喋舌をやつてしめいました、』

道之助は、菓物賣りが語り終るのを待ち搆へた樣に、共に涙を拭ひながら顏を上げた。

『君は幾つになるかね、』

道之助は菓物賣りの顏を凝視めながら問ふた。

『今年二十二になりました、』

『なに、二十二……、』

道之助は驚ひた樣に言つた。

『君が支那へ來る前には、兩親は存命だつたんだね、』

『イーエ兩親は在りませんでした、』

『ぢや兄弟は……、』

『兄が一人ありました、』

『エッ兄ッ、』

道之助は如何にも驚ひた風で、突と菓物賣の側に寄つた。

『若し……失禮だが君の名前は何んと言ふかね、』

『俺ア原欽二と申しますだ、』

『エッ……欽二ッ、』

道之助は恁う言ひなり、菓物賣りの手を握つた、實に此の菓物賣こそ欽二であつた。

『ヲ、欽二ッ、僕は兄だぞ、道之助だ、』

『エ……ッ兄さんッ、』

兄弟は互に手を取つた儘、あまりの意外に續く言葉もなく、互に顔と顔を凝視めるばかりであつた。

風蕭々の夕べ、異郷の月は既に高く、夢かとばかり奇しき邂逅に、相もつれて泣く兄弟を淡い光で照した。

『四十二』

絆に射る淡い月光を船背に浴びて、巨船アジャ號は夜氣靜寂な浪上を走つて居る。

夜は既に更けて居る、船内聲靜まつて四邊には人の影もない、唯機關室から響く異樣な音と、船舷水を切る烈しい音が耳痛く聞えて來るばかり。

今しも寂かな甲板の欄干に近く、小さな食卓を圍んで水天端しない大海原を眺めながら折々は快い笑聲を洩しつゝ語つて居るのは、既に生死を疑つて居た兄弟が思ひがけもない異郷の空に邂逅の悦びを得て、今し相携へて歸國の途にある道之助と欽二であつた。

『兄さん、俺ア恁ふして居るのが、夢の樣でならねいだが……夢ぢやなかろふのハッ〳〵〳〵、』

『實際夢の樣だね、』

兄弟は恁ふ言つて齊しく飲みかけのコップをとり上げた。

『ヲ、忘れて居た、お前は元と家に居た、德三と言ふ爺やを知つて居る筈だね、』

『德三ッ、知つて居る筈どころぢやねい、ありや俺アの命の親だよ、』

欽二は慌た樣に言つて、兄の顏を見た。

『其れを如何して兄さんは知つて居るだの、』

『知つて居る譯か、其れは恁ふだ、』

道之助は德三が父の墓前で自害しやうとした事、折よく自分が止めた事、其れから德三が欽二を助けた物語りをした事、欽二に別れてからは、身は乞食となつて、殆ど全國を尋ね廻つた事、今は住吉家に在つて明け暮れ欽二の身を安じ暮して居る事、

道之助は殘りなく語つて、

『實に德三は原家に對して無二の忠僕だねい、』

と附け加へて賞めた。欽二は兩の眼瞼から溢れ出る涙を袖で拭ひながら、凝と聞いて居た。

『ア、、實に感心な男だなア、其れはそふと兄さん、あのそら麹町の伯父さんは、

相變らず彼樣して居るだかの、』

『ヲ、、伯父さんか、伯父さんの事に就ては長い話があるよ、』

道之助は林檎の一切を摘みながら、

『伯父さんは、今は隨分難義をして居るよ、』

『エッ、難義を……其りや什麼してな……、』

『實は丁度僕が此ちらへ來る前だつた、そふだねい……何でも僕が出發の二三日前だつたか、友人の處へ暇乞に行つた歸りに、小石川の大曲の處へ來るとな、そらあの伯母さんに邂逅つてね、其時は破れた三味線を彈てね袖乞をして歩て居たよ、それから伯母さんが拒むのを無理に伯父さんの家に行つて見ると、其れは御話にならん、暮しをして居たよ、實に驚いたよ、』

『ウーム、でも伯父さんや安三さんは達者なんだろうのふ、』

『さア、其れが長い話なんだ、伯父さんはね、大病で居るんだ……、』

『エッ、大病で……、』

『でも此間、僕が獨逸に居る内に寄して呉れた手紙では大分快い方だそふだが…、』

『で、安三さんはの……、』

『さア、あの安三さんが、彼樣した難義の原因だそふだ、つまり伯父さんの病氣も其れが因らしいんだね……、』

恁ふ言つて道之助は伯母から聞かされた、安三の放埒な顚末から今は行衛さへ不明になつて居る事を語つた。

『ウーム、イヤ當然だ善い境涯は出來ぬ筈だよのう、でも病氣が快い方ではマア好かつたの、』

恁ふした沁りした話に時は移つて唯夢の樣な嬉しさに飲み交わすウキスキーの瓶も盡きた、道之助は四邊見廻して、

『如何だ、大分深更い樣だから、寢る事にしやうかな、』

恁言つて兄弟は立ち上つた、而して今し甲板を下り樣とすると舳先の方で、けたたましい人聲がした、兄弟は何事が起つたのかと思つて、足を引返して舳先の方へ走つて行つた、見ると四五人の船員が一人の火夫らしい男を圍んで、頻りに撲り附けて居た、火夫らしい男は手を合せて詫びて居た。

『一度や二度ぢやないんだから……、』

『懲りるまで撲つてしまへ……、』

『良いから打殺してしまへ……、』

圍んで居る人々の口からは恁ふした聲が頻りと起つて居る、道之助は進み寄つて、中の上役らしいのゝ肩を輕く敲いた。

『ヲイ如何したんだ、マア喧嘩なら止せ。』

肩を敲かれた男は驚いて振り向ひた、見ると其れは毎日顏見合せて居る掃除係りの長であつた。

『ヲヽ、旦那で御座いますか、イーヱ何卒御かまい下さいますな、癖になりますから……』

『マア、止せ〳〵、全體如何したんだ、』

道之助は恁ふ言つて問ふた、側に居た脊の高い男は口を出した。

『イーヱ、旦那、此りや此の船の火夫なんですがね、今仲間の金を盗りアがつたんです、其れが旦那一度や二度ぢやないですから、何卒御かまひ下さいますな、此まゝにして置くと癖になりますから……、』

恁ふ言つて脊の高い男は再び撲ろうとした、道之助は慌てゝ押止めて、

『マア待て、成程其れぢや折檻もせにアならん、が然し如何だ今晩は一つ僕に委して呉れんか、僕は一通り話して見たい事があるから、な一つ今晩は此ま、僕に委して呉れ、』

『イーヱ旦那、御情をかけて下さいましても、到底駄目な奴なんですから、打捨つて置いて下さいまし、』

『イヤ、そふでも有ろうが、後は兎も角として今晩だけ僕に一つ言して見て呉れ、』

『左様で御座いますか……到底も駄目なんですがねい……ぢや折角旦那が其様まで仰有つて下さるんですから……ぢや一つ嚴りと御誡せなすつて下さいまし、』

『委して呉れるか、有り難ふ、ぢや兎も角君等は退つて居て呉れ、』

圍んで居た四五人は何れも忌々しいそふに蹲つて居る火夫を見遣りながら道之助の前に頭を下げて退つて行つた、道之助は同勢の退つて行つたのを見送つて火夫の側に寄つた。

『ヲイ、お前は此の船の火夫だそふだね、』

火夫は兩手を突て、

『旦那様、有り難ふ御座いました、御蔭様で、』

『ヲイ、有り難いぢやない、僕はお前を助けたのぢやないぞ、僕は今の人達に代つ

てお前の不心得を責めるのだ。』

言ひながら道之助は少し隔てゝ蹲つた。

『ヲイ、お前は盗みをしたと言ふが眞實か、』

『……面目も御座いません、』

『ウム……如何言ふ考で人の物を取つたか、』

『……遂……何して、不自由な所から……、』

火夫は頗る不要領な言葉で言つた。

『ウム、唯其れだけの望で人の物を盗つたんだね、』

『……ハイ……、』

『ウム……然し如何だ……お前の考では人の物を盗むのは惡かねまたは善いかね、』

『……其りや旦那……、』

『何らかね……、』

『……其りや旦那……惡の惡で御座います、』

『ウム、ぢやお前は善か惡かの判斷が就かずにやつた事ではないんだね……、』

『……そりや……、』

『ぢや盗みをすると言ふ事は、人間のしてならない事は知つて居るね、』

『……よく存じて居ります、此れからは決して致しません……、』

『ウム……よし……、ぢや僕も實は今お前に人間の辿る可き道に就て善と惡の差別を話そうと思つたが止そう、何も言わん、其れでは今お前は此れからは決して惡いと判斷の付た事はせんと言つたね、』

『ハイ、』

『よし、それぢや恁ふしやう、今茲で僕と誓ひを立て呉れ、今日以後に於て、自分の常識から判斷して少しでも人道にはづれた事だと思つたら決してせないと言ふ事を……僕は名は言わんが實は僕は其の正と邪とを判定する職務に在るものぢや

から、若しお前が此後に於て、お前が悪い事をしたと聞えたら許さんぞ、』

道之助は如何にも沁りした調子で言つた、頭垂れたまゝ凝と聞えて居た火夫は道之助が語り終ると、崩れる様に打伏して仕舞つた、そして幽かな聲を上げて泣き出した。

『旦那様ッ……有り難ふ御座いました、私は今日只今、誓つて改心致しました、あゝ、旦那様、何卒御救ひ下さいまし、如何にも今日只今、御言葉通り堅く〳〵御誓ひ致します、』

徐ろに上げた火夫の頬邊には潸然として數行の涙が溢れて居た。

『ウム改心したか、』

『御救ひ下さいまし、』

『ウム感心ぢや、然しお前は妻子があるのか、』

『御座いません、』

『親はあるか、』

『……旦那様……其の御問ひに預りますと、む胸が張り裂ける様で御座います、エイ、一層の事、今此處で私が今日までの罪惡を御話し致します、イヤ何卒さして頂きます、』

恁ふ言つて火夫はまた一頻り流れる涙を汚れ果てた袖に拭つて、

『私も元は可成の家に生れた身で御座いましたが、多少金が自由になります所から放蕩に身を持ち崩し、惡い友人に唆かされては、あらゆる罪惡を犯し、獄舍の鐵窓に一年餘りの苦役を勤めた事も御座いました、其内に家產は遂々〳〵無一物と言ふ有様、其んな恁んなが原因で、父は病苦の身となり、昔の身には物置小屋とも見る長屋住居、母は幽かに殘る細腕に破れ三味線を抱て人の情に其の日の糊口を賴むの身となつたので御座います。』

火夫は恁ふ語つてまた涙を拭つた。

『恁した憐れな親の苦難を見てさへ曲りに曲つた私の心は、今日が今日、今が今まで直らなかつたので御座います、』

瀧なす涙と共に物語つた節々、道之助が心に思ひ當る安三の消息……、

道之助は思わず擦り寄つて火夫の顔を凝と眺めた。

『君は東京の生れだね』

『ハイ』

『若し違つたら失敬だが……君は原安三……と言わんかね』

『エ……ッ、私の名を』

『ヲ、、安三さんであつたか、僕は道之助です、』

恁ふ言つて道之助は、やにわに火夫の手を握つた。

『エ……ッ、道之助さんッ……面目ないッ、』

其まゝ火夫は道之助の手を振り切つて逃げ出そうとした、實に此の火夫こそは、

意外にも原安三の零落の果であつた。

『御心配に及ばんです、』

恁ふ言つて道之助は再び安三の手を握つた、そして欽二を顧みて、

『ヲイ欽二、安三さんであたつよ、』

其時は既に欽二も側へ寄つて居た。

『安三さん、久濶くだつたのふ、私ア欽二だよ、』

『エッ、欽二さん……面目ありません、』

引止められて詮方なく、安三は其まゝ顔も得上げず、打伏して居る。

『實に奇遇でした、それに就けても、貴郎が安三さんであると知れて、益々唯今の御悔悟が嬉しい、實は、』

と道之助は語り出して、洋行する前、伯父伯母に偶然邂逅た事を語つた、安三は唯道之助が昔の逆待も恨まず、恁した情ある道之助の心を心から謝するのであつた。

四邊寂莫として巨船既に眠りに入つて居る、月光淡く流れて夜の氣重くろしい甲板上には、いとも奇しき邂逅に且つ嬉び且つ憂ひ且つ笑ひ且つ悲しみ、殆ど各自が踏み來つた今日までの暦を繙て、時の過ぐるも知らで語るのであつた。

『四十三』

道之助の洋行を送つて賑つた新橋ステーションは、二年有半後の今日再び其人を迎へて茲に賑ふのであつた。

午後四時の汽車がステーションに着すると出迎の群集は雪崩の様にプラットホームに、出迎へた、今しも列車から姿を現した道之助を見ると出迎人は一齊に帽子やハンケチを振つて祝意を表した、中にも謙太郎や富美子は右左から圍んで其健康を祝した。

謙太郎は道之助の後から出て來た欽二と安三を見て不審の頸を傾けた。

謙太郎は道之助の側に寄つて。

『お前の後ろに居らるゝ方は……、』

『ヲ、申し後れました、此れは弟の欽二と從弟の安三で御座います、』

『ナニ、欽二君ッ、此りや意外ぢや、』

謙太郎や富美子はあまりの意外に後に續く言葉もなく、驚きの眼を見張つた。

道之助は欽二の方に向て、

『欽二、此方がお父さん、ナニ住吉さんで入らつしやるぞ、』

恁ふ言つて紹介した、欽二は極り惡そふにして、少しく謙太郎の前に進み出た。

『住吉さんで御座いますか、欽二で御座います、また兄が御禮の申上げ樣もない御世話樣になつて居りますそふで……、』

『イヤ此れは、欽二さんであつたか、私は住吉ぢや……、』

恁ふ言つて二人は簡單な挨拶をした、道之助は傍から、

『兎に角、御挨拶は家へ行つてからの事にしませう、』

恁ふ言つて一同はプラットホームを出た、そして道之助は多くの出迎人にそれぞれ挨拶を濟まして欽二や安三と同乘に出迎の馬車に乘つた、後一臺の馬車には謙太郎親子を乘せて谷中の邸宅へと走つた。

道之助や欽二は種々の想像に、いつの間にか馬車は住吉家の玄關先に車を止た、道之助は扉の開くのをもどかしそふに車臺を下りた、次で欽二も安三も、

其處には想像に違わぬ夫人や德三を始め、多くの書生や女中が出迎て居た、中にも道之助が言ふ可らざる嬉しさを感じたのは、其れは、

出發の時は人々の目を避けて、餘他ながら新橋ステーションに送つて呉れたおよし姉弟が今は而かも住吉家の人となつて、公然出迎て呉れた事であつた、尤も道之助は富美子やおよしからの報せで、或る事から姉弟は圖らずも、謙太郎の同情に依て同家の人となつて居る事は知つて居たので、別に驚きはしなかつた、然し素より道之助とおよしは既に知つて居る間である事は、互に秘して居た事とて、人目もなかつたら三人は相擁して其久濶の對面を且つ嬉び且つ祝す可きを、唯餘他ながらに嬉しさを包んで初對面の挨拶を濟した。

夫人は先づ走り向ひて道之助の手を執つた。

『お目出たふ……』

夫人は後の言葉を出し得なかつた。

『お母さん御機嫌よう……』

次で德三は、嬉しさに出る涙を拭ひながら、

『道之助樣……おゝ御目出たふ御座ります、德三は大丈夫で御待申して居りましたよ、』

恁ふ言つて德三は涙の浸んだ眼を見張つて道之助の顏を見上げた。

『ヲ、、德三、よく待つて居て呉れた、それはそふとお前に見せて嬉ばせる者があ

る、』

謙太郎は側から聲をかけて、

『兎に角家内へ這入つてからにせい、』

恁した嬉びの裡に一同は家内に入つた。

道之助は改めて挨拶が濟むと、德三に向つて、

『お前に合せるものがある、』

恁ふ言つて欽二を指しながら、

『德三、此人を見覺えないか、』

德三は微笑を浮べながら、凝と欽二の顏を見た、

『へイ、御目にかゝつた事は有るので御座りませうが……何分年をとりましてハイ……失禮で御座いますが誰樣で……』

其うちに、欽二は堪へられなくなつて、衝と德三の側に寄つた。

『ヲ、爺や、久濶だつたのふ、俺ア欽二だよ、』

『エーッ欽二樣ッ……ヲ欽二樣、欽二樣ッ……逢ひたふ御座りましたふふふふふ、』

二人はやにわに手を握つたまゝ後の言葉もなく、あまりの意外と嬉しさに、其場に泣き崩れてしまつた、側に見て居る人々も各々瞼をしばたゝいた。

恁ふした今日の悅びに、また偶然の悅びさへ加はり、玆に始めて、世の荒波は治つて、四海靜穩、原家は益々榮えるのであつた。

小説 あら浪 終

大正三年一月七日印刷
大正三年一月十三日發行

（定價金四拾五錢）
（郵税金六錢）

著者　中井苦香

東京市下谷區御徒町一丁目十番地
發行者　菅谷與吉

東京市神田區松住町五番地
印刷者　菅井十一郎

東京市神田區松住町五番地
印刷所　碇文社

不許複製
あら波
奥付

發行所　東京市下谷區和泉橋通御徒町一丁目十番地　日吉堂本店
（振替東京　二五二六七番）

小説	棄児	やなぎ生著	竹園書	四六版全一百二十七頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	みなし子	やなぎ生著	竹園書	四六版全一百二十八頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	金瓶梅	やなぎ生著	竹園書	四六版全一百二十六頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	意外の秘密	やなぎ生著	竹園書	四六版全一百二十四頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	孝子の涙	やなぎ生著	竹園書	四六版全一百二十六頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢

小説	親の罪	みどり生著	竹園書	四六版全一百二十八頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	此一戰	海の人著	竹園書	四六版全一百二十六頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	悲慘	みどり生著	竹園書	四六版全一百二十五頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	血染の美人	默禪著	竹園書	四六版全一頗美本 定價金參拾五錢 郵税金六錢
小説	鈴子	本山荻舟著	竹園書	四六版全一百三十五頁 定價金參拾五錢 郵税金六錢

少女小説　植松美佐男著
涙の雨
四六版　全一冊
定價金四拾六錢
郵税金二錢

家庭少女小説　植松美佐男著
悲哀の花
四六版　全一冊
定價金四拾六錢
郵税金二錢

小説　植松美佐男著
悲しき戀
四六版　全一冊
定價金三拾五錢
郵税金二錢

小説　守田有秋著
兄と妹
四六版　全一冊
定價金三拾六錢
郵税金三錢

武俠小説　中井苔香著
膽勇五少年
四六版　全一冊
定價金三拾五錢
郵税金二錢

270
95

終